



# 六花

2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

11月号

# 山田六甲

もみぢ

れん  
連

を  
踊るかに滝を落ちゆく紅葉かな

と  
鳥遊ぶ楓紅葉の木洩日に

こ  
甌岩黄葉の影に入りけり

は  
初紅葉ねぢりてゆける風の中

つ  
つるつると百度石へと紅葉落つ

か  
飾りとす楓紅葉のてんぷらを

む 蒸まんの湯気立ちぬたる紅葉山  
り 両親の愛せし板屋楓かな  
し しらじらと明けきし朝の薄紅葉  
て 手弁当提げて紅葉の甲山  
な 生栗を噛みつつ紅葉峠越ゆ  
ら 落首ある寺の東司の紅葉かな  
の 野良着脱ぐつきし紅葉払ひつつ

む 群雀木の葉混じりに降り来たり

か 柿熟るる枯れゆくのみ山里に

し 白々と葛のただよふ夜更かな

を 檻錆びて秋冷の風吹けるのみ

と 遠浅の海に霧立ち込めにけり

こ 濃く淡く紅葉かさなる古木かな

は 華やかや裂けきり果てし柘榴の実

つ 釣り上げし魚に小春の日差しかな

か 枯菊を折りては焼べる焚火かな

む 虫の音のか細うなりて来たりけり

り 龍胆の打ち上げられし浜辺かな

し 障子貼る濡れし布巾をくはへもて

て てのひらに計りては栗拾ひをり

な 泣きやまぬ児に握らせるねこじやし

# 音澄める炭の風鈴買ひにけり 松本文一郎

おとすめるすみのふうりんかいにけり まつもとぶんいちろう

代々の植田巡りて一服す

見霽かすけふの植田は静もれり

星祭里親待ちの仔猫鳴き

不意に出て木立に消えし夏の蝶

炭の風鈴を買ったよ、と原因だけを言っただけのこと、読者の鑑賞にゆだねている。読者は買ってきた炭の風鈴が涼しげな金属音を立てている光景を想像し、寝転びながら涼んでいる人や自らを連想し、その場を再現する。風鈴は南部鉄を代表に、ガラス・貝・木片・竹など様々な材料があるが、炭を使った風鈴は風までも浄化してくれそうだと、気持ちよさそうに涼んでいる。但し変わった材料の風鈴を詠んだ特殊性を賞めているわけではなく、さらりと原因だけを詠んだのが評価できるのだ。俳句は原因だけか、結果だけのどちらか一方を言う文芸だから。

# 大夕焼よぎりゆくなり鳥一羽

## 出口 誠

おおゆやけよぎりゆくなりとりいちわ でぐちまこと

秋暑しおもちや並べて見てるだけ

秋暑し脱線電車気づかれず

白壁を朱く染めゆく残暑かな

二階へと真直ぐに入る残暑かな

天空いつぱいを染める大夕焼の中を一羽の鳥が切々と過（よ）ぎってゆく。荘厳な大自然の現象と、小さな鳥の関わりが躍動的で力強さを感じさせし生けるものの存在を見る思いである。どのような鳥がどの方角にとんで行ったかは読者の鑑賞に託してある。だが「大夕焼」と「鳥一羽」の上下が入れ替えられる、いわゆる山本山の句。それを回避するために「夕焼や」・「一羽かな」などの表現も考えられるが、韻律と内容が句形の不備を補って余りがある、と主宰・副主宰ともに意見が一致。誠さんは大景を詠むとき力を發揮す

# 大合掌の手が藪蚊打つ孟蘭盆会 菊谷 潔

がつしようのてがやぶかうつうらぼんえ きくたにきよし

生き死には知らず鳴ききる蝉の声

百万遍岩にしみ入る蝉の声

桔梗一枝切られて生きる古染め付

雷鳴の鳴るほどでなし茄子に水

喜劇は最大の悲劇で、悲劇は最大の喜劇。悲喜劇は表裏一体。この句はまさにそれ。人はご先祖様や新たに、ご先祖様に仲間入りする霊を此岸に迎え、盆の中日に様々なお供えと経で霊を慰め鎮める。昔から盆の間は殺生を戒め漁師は漁を休み、人は釣りをひかえたりするのに、こともあるうに孟蘭盆会の最中に飛んできた藪蚊を殺生しなければいけない羽目に。蚊だつて五分とはいえ魂がある。これこそ最大の皮肉であり、喜劇で悲劇。蚊を打つた罪深き手で何事もなかったように霊を鎮める。その光景におかしみが漂う。人を刺そうと飛んできたうあぶ蚊にとつてはとんだやぶへび。



雪 卿 集

友あり

貝森光洋

友あり遠方より来る十二湖の夏  
縞模様弾け飛ぶほど西瓜熟る  
風という天空の箒いわし雲  
名人は指の先まで踊りけり  
なめくじらにやりにやりと歩みおり

鈴

梶浦玲良子

まん中のひとつが鳴咽ほたる草  
みづうみの渚まぶしき虹の幌  
かまきりの峠こえゆく鈴の音  
とらの尾のどこまで帰る茜雲  
さみだるる目差しはるか湖底の灯

せつじゆしゆう  
雪樹集

夕  
菅

空  
音  
(元・武田美雪)

秋夕焼茜は冴えてより沈む  
法然の和歌のごとくに月澄めり  
影踏み<sup>かげふみ</sup>の我の背中に今日の月  
星月夜暑中見舞ひを出さぬまま  
夕菅にホースの水を弱めけり

秋  
冷

久永  
つう

一口のジュースに伝ふ秋の冷え  
栗の実の弾けし山路豊かなり  
朝霧の晴れゆく百舌の一声に  
山の幸抱いだきて故郷秋に入る  
新蕈の匂ひ残して稲を刈る

# 蛍雪譚 六甲

名人は指の先まで踊りけり

貝森 光洋

名人の踊りは指の先まで踊っているのであるという発見。踊りの神髄は指先にあると言っても過言ではなからう。ちなみに阿波踊りを上手く踊るためのコツを詠んだ俳句に「星取つて抛ればすすむ阿波踊」というのがある。なるほどそのとおりの仕草を真似てみれば納得できる。夢風撰候補。

みづうみの渚まぶしき虹の幌

梶浦玲良子

虹の幌とは幌を掛けたような状態の虹をいうのである。半円形の虹がかかった湖の渚は雨後の太陽の反射によつて輝く。その輝く形が弧を描く湖の渚の地形まで虹のように見えて来る。また、虹が湖に映っている景色にも想像が広がる。